

19世紀初頭丸森町の「町場替」と 歴史的空間の変遷

人間・社会対応部門 歴史資料保存研究分野
川内 淳史

1. 丸森「城下町」の形成

戦国～江戸時代初頭の丸森

- 天文17年（1548） 伊達植宗（政宗の曾祖父）の隠居城として丸山城築城
- 元亀元年（1570） 相馬氏の所領となり、門間大和が丸山城主となる
- 天正12年（1584） 伊達・相馬の抗争の末、伊具郡は伊達領に
- 天正16年（1592） 黒木宗元（旧相馬家臣）が丸山城主となる
- 天正17年（1593） 黒木宗元に代わり、高野親兼が丸山城主となる

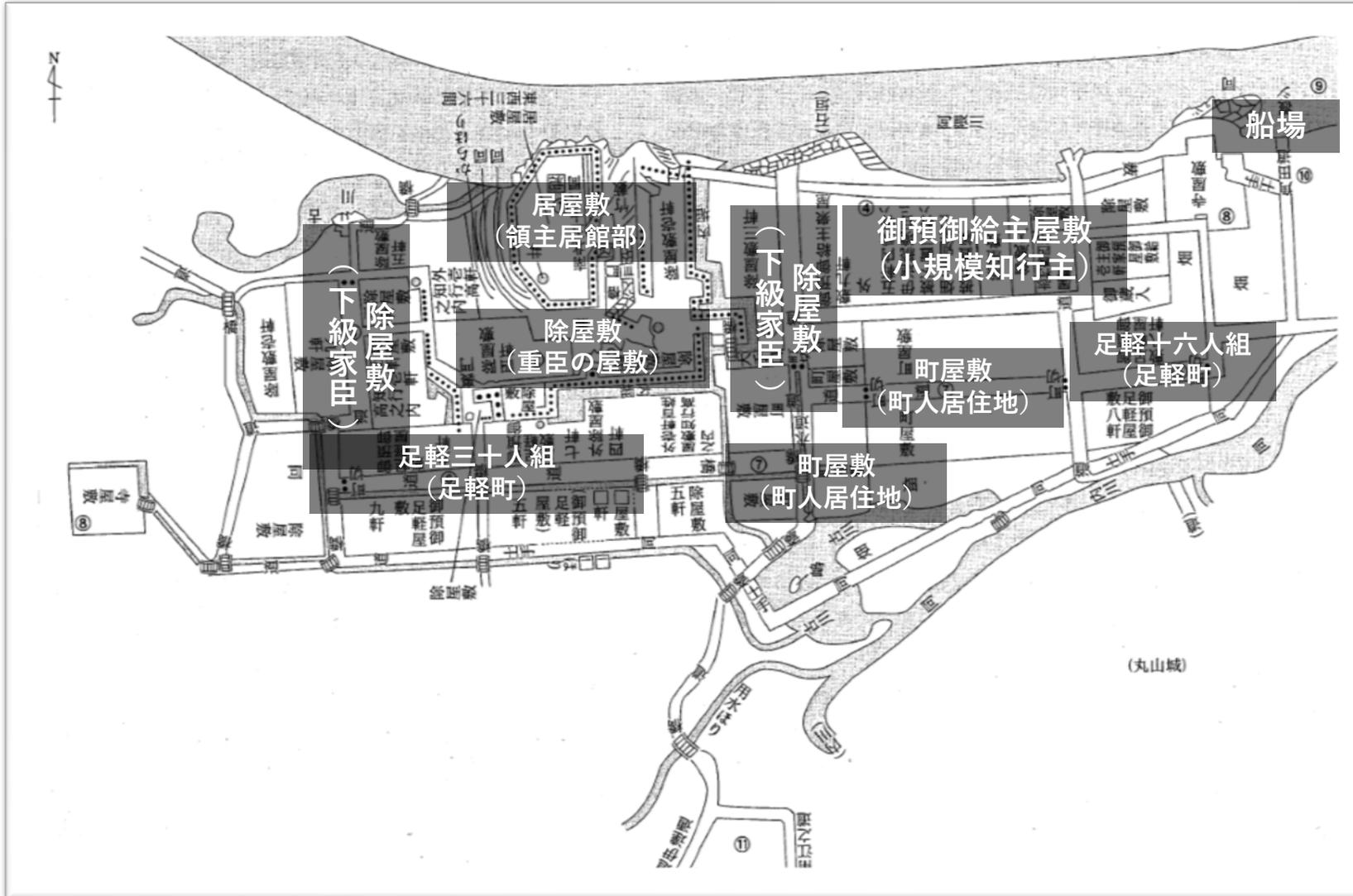
伊達—相馬抗争の最前線としての丸山城

- 慶長6年（1601） 大條実頼（尾山大條氏）が丸山城主となる
- 同 年 大條実頼が阿武隈川沿いに鳥屋館を築いて移る

- 以後、大條氏→山口氏→遠山氏→佐々氏と変遷
- 丸山城→鳥屋館に領主拠点が移動

1. 丸森「城下町」の形成

鳥屋館を中心とした「城下町」の形成



・居屋敷（鳥屋館）を中心に、同心円状に除屋敷（家臣屋敷）を配置

・重臣の除屋敷は居館下の微高地にあり、内堀と柵で囲まれて内郭部を構成。内堀のすぐ外に下級家臣の除屋敷がある

・その外側に足軽や町人の屋敷地を配置

・町人の屋敷地は本町と横町に分かれ、木戸類似の「町切」で仕切られる

・下級家臣、預給主、足軽、町人の屋敷が、川、土手、堀で囲まれて外郭部を構成

千葉正樹「在方城下町をめぐる論点と展望—仙台藩領丸森町場の事例から」『年報都市史研究』9号、2001より

1. 丸森「城下町」の形成

鳥屋館を中心とした「城下町」の形成



- 鳥屋館「城下町」は、東端を字神明、西端を字除、南端を国道113号線と県道45号線を結ぶ道路の範囲内
- 現在の町役場周辺はもちろん、伝統的な町並みのある「齋理屋敷」周辺も、城下町の外側に位置する

2. 阿武隈川水害と「町場替」

18世紀前半の水害とその対応（千葉2001）

- 享保16年（1731）2月の足軽十六人組からの願書

- 居住地が阿武隈川、内川に近接し、町場よりも低い場所があった
- 正徳4年（1714）から享保15年（1730）秋にかけて数度の洪水に遭い、家屋が流失してしまう
- 居住地が窪地にあるため、土手が切れなくても水が溜まってしまう
- 領主と足軽と共同で土手普請を行ったが、その結果、阿武隈川・内川とも天井川化してしまった
- そのため、少しの増水でも土手が支えきれなくなってしまった
- そのような事情のため、「菱河内屋しき辺」（現在の字菱川内、丸森小学校の上）へ所替をさせてほしい
- 同様の移転願は、預給主、町人からも出される



- 出入司（仙台藩の財政総括責任者）は「川除土手」の増嵩と「悪水」を抜くための水門の倍増で居住可能と判断、享保19年（1734）までに対策工事を実施
- しかしながら、その後も洪水被害は終息せず

2. 阿武隈川水害と「町場替」

水害対策としての経済活性化策とその失敗（千葉2001）

- 寛政10年（1798）の「丸森村馬市場廃止願」

- 寛政5年（1793）に水難で苦しむ「馬町場」の「御救」のため、肝入が「駄日市」開設を願い出る
- 藩より年50日開催の認可が出るも、隣の角田で同様の認可があり「不盛」となる
- 寛政8年（1796）に日数を20日に減らすように願い出、翌年、20日開催したが、同様に「不盛」となる
- 結局、町場役人より廃止を願い出、藩より認可されて終わる



- その後も続く洪水被害に対する経済活性化策としての市の開設も、周囲との競争に敗れ、失敗する結果となる

2. 阿武隈川水害と「町場替」

寛政11年9月水害と「町場替」 (千葉2001)

- 寛政11年9月7日（新暦10月5日）夜、大風雨のため洪水発生、丸森町場の土手を押し切り、家屋が流失
- 「住居不叶」状態となったため、「願」を出して町場を引き移す
- 「佐々和泉俊定へ請の如ク水難ヲ避テ采邑を伊具郡丸森町へ移スヲ許ス」（「六代治家記録」寛政12年3月29日条）
- 町場替の公認以前に「勝手」な移住も行われ、すでに「丸森町」と呼べる状況が成立していた。
- また「勝手」な移住に対して、預給主らからは「不服・故障」が言い立てられる事態になる



- 移転事業は享和元年（1801）より着手され、享和4年（文化元年、1804）に完了
- 事業のための人夫のべ12,761人のうち、町人負担は2,000人（16%）、伊具郡もしくは領主への「役」を充当したのが5,380人（42%）、領主あるいは仙台藩の負担が5,380人（42%）
- 工事指揮と空間計画は仙台藩の普請方が担当
- 工事完了に先立つ享和3年（1803）に、町人より「丸森村新船場願」が出され、商業上の理由より船場を神明より新しい町場の北側に移して欲しいと願い出され、許可される
- 一方、足軽町は新しい町場ではなく、従来のような「集住」を解体し、山側への「散村型」へと移る

2. 阿武隈川水害と「町場替」

寛政11年9月水害と「町場替」 (千葉2001)



- 町場替が行われた結果、旧城下町内には武士のみが残り、新しい町場（丸森宿）とは「田」を隔てて残存
- 新しい町場は南北の通り（現・県道45号線）を軸として、北に設置された新船場と接続
- 阿武隈川水運の発展とともに、船場と接続された新しい町場も発展、「斎理」などの豪商も現れる



現在の丸森町中心部の「原型」が成立

- 町場替以降も水害は頻発し、特に船場周辺は流失を繰り返す
- にも関わらず、再び町場の移転願は出されることはなかった



- 経済の活発化により、水害を容認し得るという町人の意識
- 災害に対する町人の「レジリエンス」として評価可能？

- 旧城下町のうち、領主居館部は丘陵地、重臣の屋敷は微高地に所在
- 町場替により、町人居住地は微高地に所在、また足軽町移転先は丘陵上もしくは山沿いの地域に所在



「地理院地図」を3D化 (高さ方向の倍率3.8倍)

2. 阿武隈川水害と「町場替」

2019年台風19号の浸水域との重ね合わせ



- 19世紀初頭の「町場替」により成立した丸森宿については、今回の台風では浸水なし、もしくは軽微な被害
- 旧城下町の範囲も、領主居館部ならびに重臣屋敷の周辺は浸水せず
- 旧城下町にあった足軽町・町人居住地は浸水

19世紀初頭の「町場替」は、繰り返される丸森の洪水の経験／歴史を前提に行われ、町場が形成されたか



10/20の齋理屋敷。前の道には水が流れた跡が確認できる

「宮城資料ネット・ニュース」353号より

2. 阿武隈川水害と「町場替」

新たなリスクとしての「山津波」

- 明治3年（1870）9月の「サトージ嵐」（午年の台風）
- 明治3年（1870）9月17日（新暦10月11日）昼過ぎより大雨。翌18日まで降り続き、昼頃より大嵐となる。同日五つ時（午後8時）、町場の東側の家屋に水が押し寄せる
- 新町場を中心に、阿武隈川沿い・山沿い・中山間部で大きな被害
- 「右は前代未聞之大高水とは乍申、山津波と申物ニも可在御座と考申候」
 - 浸水被害と同時に土石流（土砂災害）による被害の発生
- 「当作毛、最初ハ格別宜敷事ニ面々相心得居候所、追々ニ至り甚模様不宜、其上右高水ニ付、一体ニとろ稲と相成」
 - 水田に土砂が流入し、稲が「とろ稲」となり不作となる



丸森町竹谷地区の水田、田に土砂が流入し、稲に泥がつく（=どろ稲），2019.10.31撮影



山沿いへの「町場替」が土砂災害という新たなリスクを生んだ可能性？

サトージ嵐の被害(横町契約会「御念仏講誌」『丸森町史 史料編』資料371より)

漆原屋敷

- 久五右衛門 家屋・厩・木小屋・雪隠倒壊
女房、山崩れに押し流され死亡、遺体は横丁森林より5~6日後に発見
- 直助 家屋・釜屋・雪隠倒壊
直助娘が怪我をするも、逃げ延びる
- 小太郎 家屋・木小屋・雪隠流失

船場

- 與吉 家屋が午前0時頃に阿武隈川へ流失
- 善助 女房および子供2人死亡
女房は神明前桑畑、子供は中島天神宮の杉の木、五福谷前苗代で遺体発見

細内屋敷

- 左與治 家屋・家財とも流失。家族3人死亡
他所より逗留していた親子2人死亡

本町

- 19日午前2時頃に水が押し寄せ、彦松前小路に厩が流れ着く。これは漆原屋敷の久右衛門(久五右衛門?)の厩である

町場小路

- 横町~本町まで流れる水の勢いが強く、まるで荒川同様に、通行することも恐ろしい程

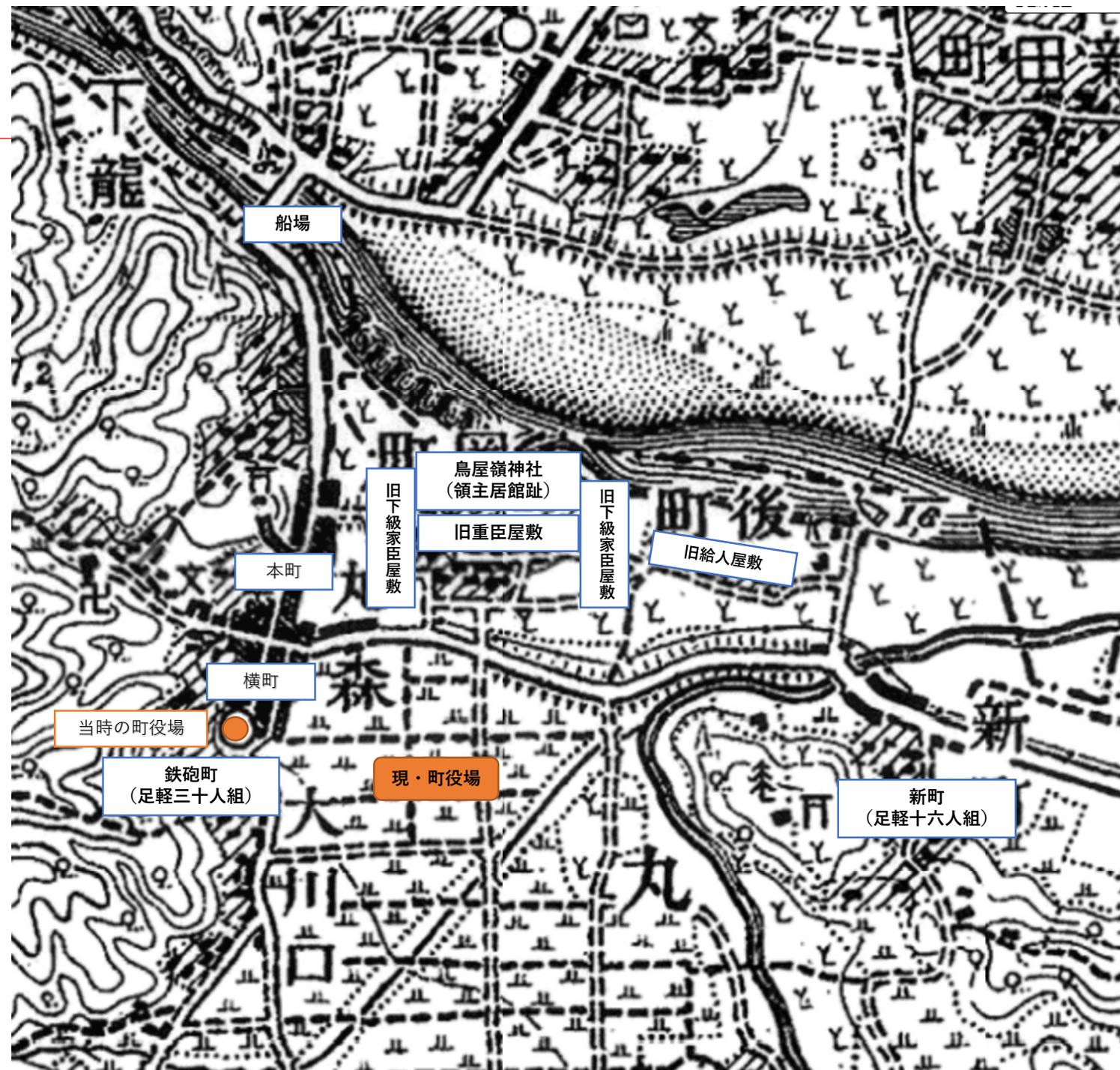
横町

- 丈吉裏街道16mほど土砂が流入し、義兵衛座敷前より砂山となる。丈吉の厩・小屋掛、義兵衛の木小屋・厩、丈吉裏通りの卯兵衛が借り受ける木小屋などの建物が押し倒され、辺りは「石川原」となる
- 19日午前2時頃の出水により、裸の遺体が流れ着く。数人で見ていたうちに、横丁を流れていった。

3. 近代化と丸森町の空間変遷

丸森町中心部（1908年）

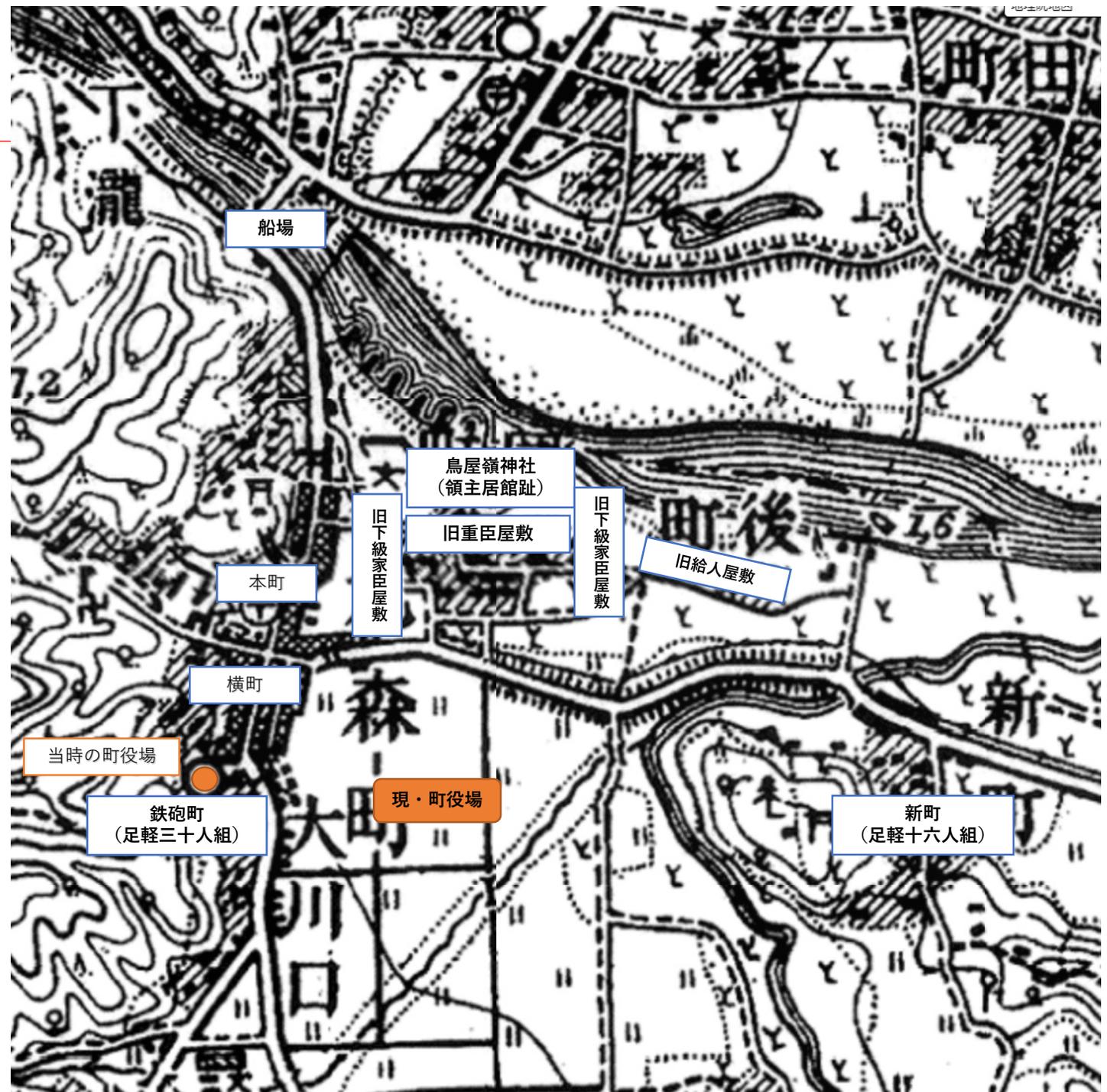
- 1889年（明治22）町村制施行により「丸森村」となる
- 1897年（明治30）町制施行により「丸森町」となる
- 旧城下町内の足軽町・町人居住地は桑畑となっている
→町場替以後発展した丸森の養蚕業を支える
- 当時の町役場は、丸森宿の南端に所在
- 現町役場周辺は水田地帯
cf. 地元住民からの聞き取りでは、「水田にもならないような湿地帯」とも



3. 近代化と丸森町の空間変遷

丸森町中心部（1952年）

- 1954年（昭和29）に丸森町・金山町・大内村・大張村・耕野村・小斎村・舘矢間村・筆甫村が合併し、新設「丸森町」成立（地図は合併直前）
- 明治期より町場はやや拡大するものの、基本的な構造は変化せず



3. 近代化と丸森町の空間変遷

丸森町中心部（1977年）

- 町役場は、丸森宿南端より、旧城下町内へ移転
- 1970年（昭和45）に国道113号線の終点が福島県相馬市に変更され、丸森町も沿線となる
- 国道113号線は、角田方面から舘矢間を通り、丸森橋を渡って本町へ入り、旧城下町南端の道（現・国道113号線と県道45号線を結ぶ道路）を通り、金山方面へ抜けるルート
- 国道となった旧城下町南端の道を越えて、南側に町立病院や電話局、郵便局など、公共機関が進出する



3. 近代化と丸森町の空間変遷

丸森町中心部（1990年）

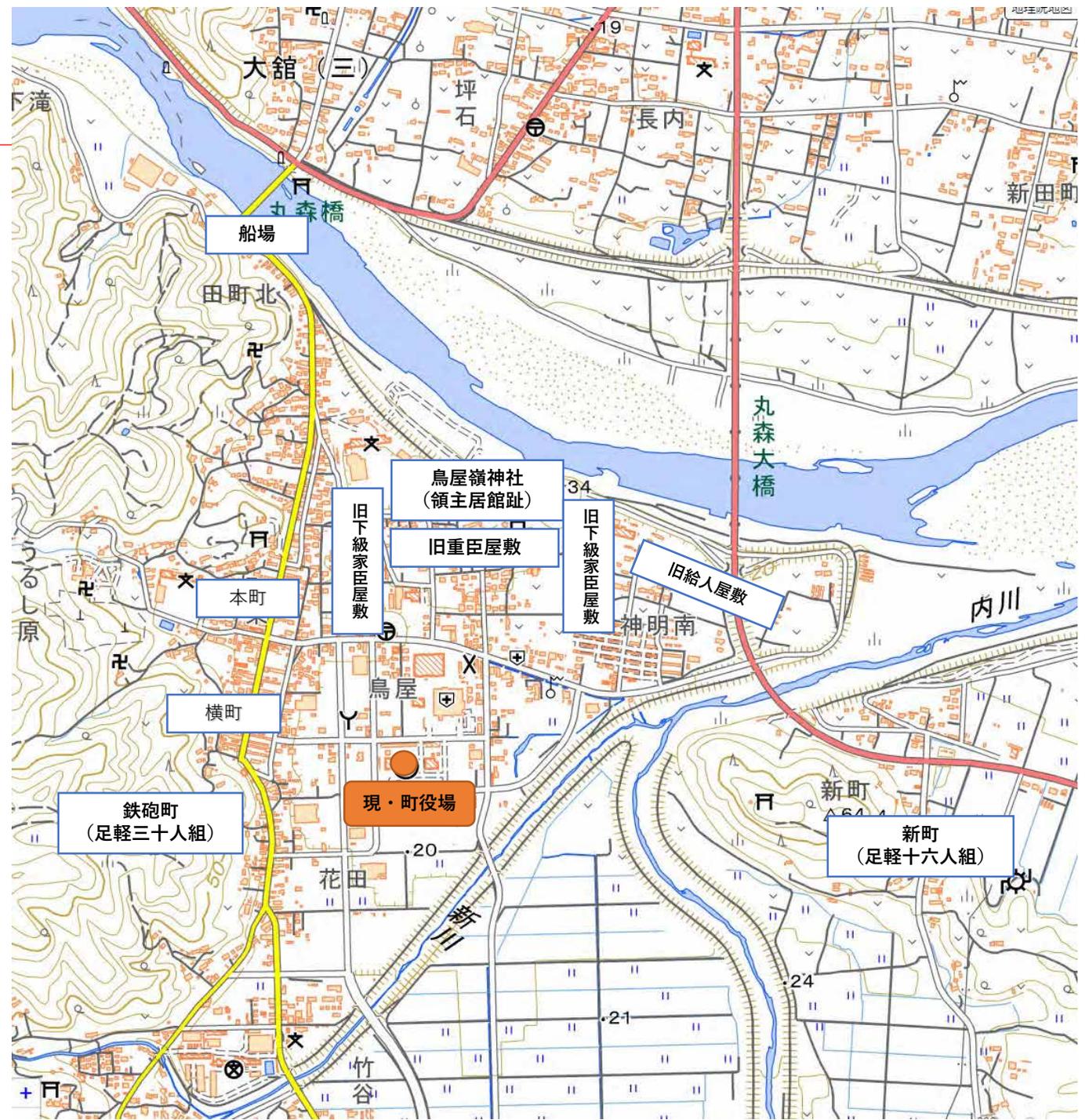
- 町役場が現在地へ移転
- 町役場周辺の道路が整備され、建造物が増え始める
→モータリゼーションの進展に対応？
- 消防署が旧城下町の町人居住地付近に設置される



3. 近代化と丸森町の空間変遷

丸森町中心部（現在）

- 町役場周辺に消防署が移転し、建造物が増加する
- 町中心部の車輛混雑緩和のため、2012年（平成24）に国道113号線舘矢間バイパス（丸森大橋を含む）が開通し、幹線道路が東に移り、旧城下町が分断される
- 旧城下町東部の桑畑部分も宅地化され、町営住宅などが建設される



まとめ

1. 19世紀初頭の丸森町の「町場替」は、過去の水害に対応した空間編成によって町場が形成され、現在の丸森町の「原型」をつくる
2. 「町場替」によって形成された新しい丸森の町場は、今回の台風においても大きな浸水被害は、基本的には受けず
3. 一方、山沿いに移転した「丸森宿」は、土砂災害という新たなリスクを背負い込むことになる
4. しかしながら「町場替」による経済発展は、災害を容認しうる人びとの意識＝レジリエンスをもたらす
5. 近代以降も、「町場替」による空間編成を基本的に継承するも、モータリゼーションの進展により、公共機関など町中心部が南へと拡大